遊楽習道風見

毛詩云、「璅兮尾兮、流離之子。璅・尾、少好之貌也。流離鳥名也」。箋云、「衛之諸臣、初有小善、終无成功、流離似也」。流離梟。

梟は、雛にて美しくて、次第に後にはおかしき様の鳥なり、と云り。しかれば、人芸の次第も、幼くて満風なるは、年盛りになりゆく所、悪かるべき相なりと見えたり。其ゆへは、於諸芸、なす態の其体に相応する所を以て、成就とするなり。成就是満風也。幼き振舞に相応せん事と者、いかやうなるを相応とは申べきや。少年の態は、心も足らず、なす所もそろはで、物ならぬ風体、是、幼き時の相応なり。さて、年年を経て、次第連続に、成人するにしたがひて、成す態もそろひて満風なるは、大人しき態の相応也。然ば、幼少の時の、なす態のそろひて見風満なるは、幼き振舞には不相応とや申べき。不相応たるにより、芸風順路に行かず。幼くて、物足らぬ所の相応あらば、又大人しくなる所にて、次第次第に物数添はば、成人する順路の相応たるべし。然ば、梟の子の、雛にては美しくて、盛りの先あるゆゑに、大人しくなれば悪き様になる、と云り。

　さる程に、幼き芸には、物まねの品品をばさのみには訓べからず。只、舞歌二曲の風ばかりをたしなむべし。是、器たるべし。其ゆへは、舞歌は遊芸の諸曲也。当芸に限りたる態物にはあらず。是、遊楽の惣物風也。此二曲をよくよく習得ぬれば、次第次第に大人しくなるにしたがひて、物数そろひて、既に三体に至る時分、何になりても、歌へば感ありて、舞ば面白は、かねて舞歌の器を蓄して持たる徳にあらずや。返返、二曲を惣物の器になして、物まね態にする所、よくよく安得すべし。

　抑、幼くて面白と見る所の、年行きて不足になる事を、猶猶不審を尽くして見るに、少年の時の当芸の態に、物まね・物数を得ぬれば、即座の見風目を驚かして、「早、くせ物」と見る所に、やがて上手と見る也。是は、其時分斗の花姿の見風にて、後には断絶すべき理多し。先、「幼くて物数を得たる達風、くせ者哉」と見る所、一。童形の幽姿の花風、一。若声の音感、一なり。是等は時風なり。後後はあるべからず。其ゆへは、「幼くて物数を得る、くせ物哉」と見る見風、大人しくならば、あるべからず。童形の幽姿、男体までは残るべからず。若声変りて音感なし。さて、細にしつけつる物まねは、幼人体の形木の得手に入ふして、成人の人内には、手詰まり、芸足らで、体変り、用失するなり。去程に、其時の花風の器、多くなくなりて、花葉色色なりつる木立の、冬枯になりたる気色を見むが如し。是等を以て思ふに、大人しく成て、遊風変りて、見ざめのする事、理と覚えたり。

然ば、是に付ても、以前申つる如く、幼き時は、舞歌二曲の惣物風斗を教へて、二曲を得手にしなして、物まね・似せ事をば知らせずして、物足らぬままにて、さて、成人にしたがひて、やうやうに三体になる時分、次第連続に物数を添へば、成長の相応の風体となりて、能長久ならん事、疑あるべからず。舞歌二曲は、遊道の諸曲なるによりて、初心・後心、老・若・童・男にわたる曲位也。物まね・似せ事は、当芸に限りたる人形なるほどに、其得手に入ふしぬれば、広風にわたる事なし。まして、小物にてしつけたらん形木に入詰まりたる身体ならば、其時の分切にて、いつまでも通るべし。少年にて物まねを尽くす所を「くせ物」と見るは、時分の花也。流離の子の雛にて美しからんがごとし。

一、論語云、「苗而不秀者有、秀而不実者有」。

此句、一生の間の芸態の稽古の序・破・急と知るべし。

少年にて為出す所の二曲の間に、舞にてもあれ、音曲にてもあれ、生得、舞へば面白、謡へば感のあらんは、早、苗なるべし。苗をばなにと育つる者やらん。只、田水をたたへて、をのれと育つる斗也と見えたり。さて、早苗ふしだちて、植田に成て、次第次第に本付時分に、草を取り、水を入て、雨を待て、やうやく稲葉になる比は、ひだつ時也。又、実のるとは、はや色づきて、日比待つる雨水をも今は厭ひて、日を待ち、陽気にさらして、これをもてあつかふは、実のらせむとなり。

　当芸の稽古も、幼き時、苗にして、二曲の潤ひを以て既に秀て、盛りの見風になりても、又、行末の長久なるべき定風を安得して、心外に見風の是非あるべき事を用心して、年行、老来に至らん迄も、遂に能芸の感風いや増しになるべき所を忘れぬ稽古は、是、実のる所を知るなるべし。仏法にも、「法を得る事は易く、法を守る事は難し」と云り。守事の難きとは、我意に迷ふ所有によて也。返返、智外に非のあらんことを、定心に用心すべし。智外に非のある所を知らで、不用心より、能は変りて、悪くなるべし。是、ひだつる稲の、風雨などに犯されて、実のらで朽んが如し。此、苗・秀・実の三段、以前申つる、一生の間の序・破・急の稽古なるべし。

一、心経云、「色則是空、空則是色」。

諸道芸に於ても、色・空の二あり。苗・秀・実の三段終りて、安き位に至りて、万曲ことごとく意中の景に満風する所、色則是空にてやあるべき。然ども、無風の成就と定位する曲意の見、いまだ空則是色の残る所、若、未得為証にてやあるべき。然らば、智外の是非の用心、猶以て危みあるべし。此用心の危みもなく、何となす風曲も闌かへりて、まさしく異相なる風よと見えながら、面白て、是非・善悪も無らん位や、若、空則是色にてあるべき。是・非共に面白くば、是非あるべからず。智外の用心も又あるべからず。

　歌道にも、同字病とて、歌の病を戒められたれ共、「難波津に咲くやこの花冬ごもり今は春べと咲くやこの花」とあり。そは、ことにあらはれたる同字なれども、まことによき歌になりては、病難も障らぬ位ありと云り。さればにや、歌の父と定められけん。

又、「小馬とめて袖打はらふ蔭もなし佐野のわたりの雪の夕ぐれ」、定家の名歌なり。抑、此歌、名歌なれば、元より面白く聞えて、さて面白き所を知らず。只旅行の折節、雪降りて、立寄るべき陰もなき、路次の体かと聞えたり。但、歌道は不知の事なれば、別の感心もやあるらんと、道の人に尋ぬれ共、只「歌の面風のごとし」と也。然ば、聞る所、さればとて雪を賞翫の心も見えず、在所を知るにも遠見などもなき山河のほとりに、誠に陰も寄るべも便りなき道行ぶりの、面にまかせたる口ずさみ歟と聞えたり。若、堪能其人の態は、かやうに言はれぬ感もあるやらん。天台妙釈にも、「言語道断、不思議、心行所滅之処、是妙也」と云り。かやうの姿にてやあるべき。当芸にも、堪能其物なむどの位に至らん時は、此「小馬とめて」の歌の如く、まさしく造作の一もなく、風体心をも求めず、無感の感、離見の見にあらはれて、家名広聞ならんをや、遊楽の妙風の達人とも申べき。

一、論語云、「子貢問云、賜也如何。子曰、汝器也。孔安国云、言汝器用之人也。曰、何器也。曰、瑚璉也。苞子云、瑚璉者黍稷之器也。宗廟器之貴者也」。

　抑、器の事、当芸に於て、先、二曲三体より万曲となる数達人、是、器用なるべし。

　諸体に亙て、広態の見勢を一身他風に所持する力道、是也。二曲三体の見聞、いづれも延感を成て、不増不減の得益あらん所、是、器物也。

有無二道にとらば、有は見、無は器なり。有をあらはす物は無也。縦ば、水晶は、清浄体にて、色文無縁の空体なれ共、火生・水生を為せり。火・水の別性を無色の空体より生ずる事、是いづれの縁正ぞや。或歌に、「桜木はくだきて見れば花もなし花こそ春の空に咲きけれ」と云り。遊楽万曲の花種をなすは、一身感力の心根也。只、水晶の空体より火・水をなし、桜木の無色正より花実を生る如く、意中の景より曲色の見風をなさん堪能の達人、是、器物なるべし。

　凡、風月延年のかざり、花鳥遊景の曲、種種なり。四季折折の時節により、花葉・雪月・山海・草木、有生・非生に至る迄、万物の出生をなす器は天下也。此万物を遊楽の景体として、一心を天下の器になして、広大無風の空道に安器して、是得遊楽の妙花に至るべきことを思ふべし。